

日本の「敗北」を決定づけたガダルカナル島 「餓島」と化した戦い



■届かぬ物資「絶食一週間」

1942年（昭和17）7月～1943年2月、南太平洋のソロモン諸島・ガダルカナル島（ガ島）での日米両軍の戦いは、先の大戦で日本が初めて撤退を強いられ、戦局の分水嶺（ぶんすいれい）になったといわれる。

米軍はラバウルからの輸送船を次々と沈め、日本軍は補給を断たれ、ガ島に上陸した将兵約3万人のうち、戦没者は2万人余り。戦闘死は推定5千～6千人で、約1万5千人は栄養失調や病に倒れた。ガ島は「餓島」と呼ばれた。

1942年8～11月、ガ島戦で潜水艦が挙げた戦果。撃沈（げきちん）した輸送船の数は、日本の6隻に対し、米国は10倍の62隻。米側が徹底して日本の補給線を狙い、日本海軍が防ぎきれなかったことを示している。

陸海軍内の身分格差

吉田裕（一橋大特任教授）

「大本営は、陸海軍の“学歴エリート”なのです。学校の成績によって昇進が決まるのです。そのために現場を知らない指揮官たちが育ってしまう」「食べ物や酒、たばこの配給から寝る場所まで差別です。」（「情報・知識&オピニオン imidas」集英社2018/09/11）

43年2月に撤退。大本営は敗退を隠蔽（いんぺい）するため、「転進」と言い換えて公表した。

「日本軍では、現地司令官の決断は見られない。大本営が官僚的に決め、責任の所在があいまいだった」。

ノモンハン事件（1939年9月ソ連軍戦車に大敗）から日米開戦、敗戦まで幾度も名を連ねる陸海軍上層部の同じ人物が、ガ島戦でも登場する。彼らは、失敗を繰り返してもなおチャンスが与えられた。惨状から80年余り。ガ島の密林内には、犠牲になった将兵らの遺骨が今も置き去りにされている。

（池田祥子）『産経新聞』2025/6/18(水)



ガダルカナル島北西岸。奥に見えるのは、米軍の攻撃で大破・座礁した日本の貨物船「鬼怒川丸」[米海軍歴史センター提供]【時事通信社】